
鈴歌、異世界へ

梨緒（元ブライトハート）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鈴歌、異世界へ

【Nコード】

N8601Y

【作者名】

梨緒（元ブライトハート）

【あらすじ】

鈴歌はその世界でなにをするのか、そしてどんな影響を与えるのか。

「・・・貴方には、守りたい物や人がいますか？」

「~~~~これは「異世界旅行へ」の書き直し版です。

初見の方は「異世界旅行へ」を見ない方が楽しめるかと思われます。はい。よろしくおねがいします。

始まり（前書き）

ブライトハート改め梨緒です。
書き直し版、投稿いたしました。

結構違った物語になりそうな予感がしてなりません。

始まり

事の始まりは母のK4の中。

「ねえ、お母さん」

「ん？」

「お母さんは、異世界ってあると思う？」

母は少し考え込むように唸り、
そして言ったのです。

「信じればあるよ」

~~~~~

祖父の家へ向かう車の中、自分は若干車酔いになりつつ携帯ゲームを。

ティリリン♪

(よしっ)

それは育成ゲームでハマるとことんハマるといふ評判の良いものだ。

「ホラ、鈴歌、そろそろゲームやめて。おじいちゃんの家見えてき

たよ」

「はあい」

ちなみに言つと祖父の家は超のつくド田舎で、家の裏には山がある。昔は自分もよくそこで遊んだものだ、と思い出した。

（そうだ、どうせ暇だし行ってみようか）

ゲーム機の電源を消しながら思う。

ここらへんはジ。リの「となりのト。ロ」の登場人物が住んでそうなところだ。

静かで空気がよく、川の水も冷たくて美味しい。

そんな中で幼いころの自分は育ったのだ。

都会へ出たのは小学4年生のときだったか。

今では並んで一番前だったが、すっかり背も伸び、後ろから数人ほどだ。

昔が懐かしい――

そこでふと、幼いころの記憶が蘇る。

（これは、なんだ？）

まだ見たことのない、モノ

（なんでここにあるんだろう？）

この世のモノとは思えない、ブツタイ

どこか違う星から来たと思ひ込んでいたモノ達……。

幼いころの自分は“異世界”を信じていた。

今は亡き父が小説家でファンタジーモノを書いていたせいもあって

かどうかは分からない。

ただ、気づいた時には母に聞いていた。

「異世界ってあると思う？」

きつと考えるようにしていたのは父を思い出したのであるうつと思  
った。

そして母はきつぱりと

「信じればあるよ」

と、車のエンジンを止めながら言った。

エンジンが止まったこと、それを自分は何か運命が変わる、  
扉の開ききつたことを知らせる音に聞こえたのだった。

## 始まり（後書き）

更新はチマチマやっていきたいと思imasuので、  
今後ともよろしくおねがいいたします。

## 森の祠（前書き）

ストーリー変えるっていったし大丈夫・・・。

## 森の祠

祖父の家に入ると、昼ごろに着くと言っていたからか昼飯が用意されていた。

ちなみに祖父の料理だ。

本人に聞いたところ昔ホテルの料理人をしていたそう。

祖母はというと何年か前に亡くなっている。

寂しいからかどうかはわからないが、ちよくちよく自分の家電にかけてくる。

今日もそんなところだ。

「ごちそうさま」

「はいよ」

昼を食べて挨拶をする。

食べ物は粗末にはいけない。

作ってくれる人に感謝を、そして命あるものを頂くわけだから当たり前のことだ。

今の季節は夏。

と、いつでもそろそろ寒くなり始めてもいい頃だ。それでも暑いから扇風機の前に陣取る。

「風こないから正面に座んな馬鹿！」

・・・怒られた。

縁側に出てみる。

目の前には小さな庭があり、祖母が好きだったキンレンカが咲いている。

花言葉は愛国心、困難に打ち勝つというものがあるらしい。

観賞用だけじゃなく、食用花でもあると祖母から聞いたことがある。

キンレンカを見ていて思い出した。

森に行こうと思ってたんだった。

「お母さん、おじいちゃん、ちょっと森に遊びに行つて来るー」

「気をつけなさいね」

「行つてらっしゃい」

財布と携帯とゲーム、ティッシュとハンカチなどを入れた大容量リュックを引つ捆んで玄関に行く。

靴は歩くのに適したスニーカーだ。

カラカラと戸を閉めて歩き出す。

家の裏手に回ればすぐ森だ。

案の定、木が生い茂つた森が見える。

下からも草がぼうぼうに生えているのでわしわしと掻き分けながら進む。

もっくもっくと進んでいく。

森から山に変わったようだ。

踏み固められた山道が。

「んー・・・やっぱ上に行きたいよね」

やや上り坂を歩く。

しばらく歩く。

もくもくと歩く。

「だるい」

はつきり言つと自分はめんどくさがりだ。

だからこんなチマチマ歩いているのが嫌になった。

と、いうわけで

「よし、そのまま上っちゃえ！」

身体の向きを90度変えて、いざという時のために隠れて持つてきたおじいちゃんの軍手を出す。

装着。

いざ、出発。

山道には背の高い草は見当たらないが、急斜面のこちらは草伸び放題だ。

さすが森というか山というか。

熊でも出るんじゃないだろうか、といまさら心配になる。

（まあ、大丈夫だろ）

気楽に行こう、気楽に。

2、3時間経って頂上が見え始める。

「いよつし！ちとここらで休憩しようか・・・ん？」

座れる場所を探しキョロキョロとあたりを見回すと。

「・・・祠・・・かな」

そこにあつたのは祠、祀っているものが分からないが、シンプルな昔の家をちちゃくしてみました、みたいな感じた。

供え物は何も上がっていない。

見たからにはなんか供えて行こうかな・・・と、リュックをあさる。

ポテチと爽健美茶が。

ちようど良いやと祠の横に座り、ポテチと爽健美茶を少しずつ残して飲み食いする。

「んで、ここに置いて、と」

ポテチを数枚と、爽健美茶のペットボトルのふたを開けたままそこに置く。

そしてポテチの袋を小さくして持ってきてあつたゴミ袋に入れておく。

（ポイ捨ては良くないしな）

よいしょと立ち上がりズボンについた草を払う。

そしてまたガサガサと草を掻き分けつつ斜面を登った。

1時間ほど経って頂上についた。

この山は登山客も来るため、頂上のあたりの木は切られている。見晴らしがよく、キリツとした空気が気持ちいい。

その景色を携帯で写真を撮り、空気を堪能してから下山した。

気分良く夕食を食べ、風呂に入り、布団に横になる。

意識が遠退くには時間はさほど掛からなかった。

## 森の祠（後書き）

ポイント、感想など下されば幸いです。

行ってきます（前書き）

読んでいただきありがとうございます。

行ってきます

夢を見た。

くく

あゝ眠いなゝ

カーテンを開ける。

「ん・・・!？」

様子が昨日と違っている。  
ビックリして引きつる口元、笑う膝。

「え、え？タンマタンマ、え？ちょっとまってもらえますか、あの」

誰もいない部屋で誰にも答えられない問いをする。  
静寂に包まれた部屋がささやき声で包まれた気がする。

こそこそ・・・  
ざわざわ・・・

苦しい、息がし辛い。  
居心地も悪くなる。

なんで？  
ここどこ？

わけも分からないまま、意識が飛ぶ。

〃

という、夢です。はい。

起きたときズザアッって部屋の隅に移動しちゃったよ、反射的に。  
おかげでベッドからは落ちるし、落ちたときの音で一階の母から怒  
鳴られるし・・・  
なんなんだもう。

でも、

分かっていたのは昨日の祠へ行かなければならないということだっ  
た。

一階に下りて朝食を食べているときにふと気づく。

（昨日、異世界はあると思うかと聞いたときの違和感、  
そして母の言った言葉、夢、  
何度も行っていたはずの森（というか山）に見知らぬ祠があったこ  
と。

こんな偶然が起こりえるのだろうか？）

自分してみればよくもまあここまで推測できるんだ、という具合  
である。

まっさかあゝとか思いつつ、テンションが上がる。

（・・・ちよつとまてよ？）

祠へ行かなきゃないのは分かる、早く行けと自分の中の何かが急かしているから。

でも、それで、もし、「異世界」に飛ばされるとしたら？

関係ないが実をいうと読書家だ。

家の自室には図書館並みの本棚が3つあって、壁一面本だらけつていう感じである。

さらに言うとなンタジーものばかりである。

それらの本から考えれば、異世界に飛ぶ、ということは無いと言  
い切れなくて

（言い切れない、言い切りたくない）、やらねばならないことがあ  
るのも分かった。

もしも、のために。

手紙を書いておく。

何も無くて帰ってこれたのなら恥をかくが、用心することに越した  
ことは無いだろう。

ほかには、キャンプなどで使えそうなものを探す。

（ちなみに、祖母が花のなんちゃら会で野宿するということがしよ  
つちゅうあつたらしく、

必要そうなものは大体そろっているはずだ。）

「おじいちゃん、おばあちゃんのキャンプセットみたいなどこに  
あるかわかる？」

美味しい料理をほおばりながら目の前で自分を眺めている祖父に聞

く。

「美智子さんの？ああ、あるけども、どうした？」

「いやー、何も言わず出してくれるとありがたいです」

「ふむ・・・」

無理か。

「お前さん、昨日変な夢を見たかい？」

「え？」

唐突な質問にビビる。

その態度はイエスと言っているようなものだった。

「そうか・・・。」

「え、そうかって・・・ううん？」

「旭、美智子さんとお前に引き続き、お前の子供もか！」

え？

「も」？

なんだっていうんだ、まったく。

（ちなみに旭は母、美智子は祖母の名前である）

母がどうしたの？といった風に自分たちのところへくる。

「変な夢をみたそうだ。」

「はあ・・・。」

「そして、お前昨日“祠”を見ただろう」

「うっ・・・」

それから説教じみた口調で祖父と母から説明を受けた。  
要約するとこんな感じである。

・祖母と母も自分と同じように祠を見つけ、供え物をし、変な夢を見た。

・祖母も母も何がなんだかかわからず、何も言わず、持たず、祠へ行って飛ばされた。

・聞いた話によると祖母の母もその母も、こんな風にして飛ばされ、戻ってきているらしい。

・自分くらいの年頃にそうなるらしい。

・ちゃんと察して野宿用品を求めた自分は偉い

・・・え、何、ここの先祖、異世界の住人だったんですか。

自分は啞然とするほか無かった。

だって、まさか憶測がちよっと違うがあってるってナニコレ

「鈴歌もなるの・・・」

つぶやくように、母。

「いいわ、行きなさい。」

決心するように。

「帰ってこないと承知しないわよ？」

泣き笑いの顔で。

ただ、自分はトクイのヘラツという笑い顔を見せ、準備を始めればいいということを察した。

（エライぞ、自分、空気読んだ）

母の顔にもらい泣きしそうになりながら、必要なものなどを聞きつつ準備しつつ。

そして昼を迎え昼食を食べ、まったりお茶を飲みつつ話し。

祠まで来る事になりました。

心細いもんね。

スニーカーを履いて、靴紐を結びなおして、荷物を持って。

自分たちは祠を目指す。

どこにあるかは、心の中に地図があってその場所が光っている、そんな感じで分かっている。

会話も無く歩いていくと、前方に目的の場所が。

「ついたよ。・・・もしかして見えない？」

見えないらしい、キヨロキヨロしている。

「私たちには見えないのねえ・・・でもなんだか懐かしいわ」

母はそういつて、ふふ、笑った。

そして自分の首にかけていたネックレス（？）をはずして、自分にかけてくれた。

「お守りよ、次に会うときに返してね」

約束をひとつ。

そして祖父が言う。

「お前が戻ってくるときにはわしは死んでると思うからのう、元気でな」

そういつて、はっはっはっ、と笑う。

「じゃあ、行つてきます、ばいばい」

どうすればいいかは分かっている。

祠の中に手を入れればいいのだ。

なにが入ってるか分からない、小さな祠のドアみたいなのをあけ、手をつ突つ込む。

直後、身体を襲う浮遊感、意識は、飛んだ。

## 架け橋（前書き）

読んでいただきありがとうございます。

「異世界旅行へ」からの方へ

この話に出てくる竜はヴォギッシュのことです。

名前、そして最初の形態を変えさせていただきました。

## 架け橋

「はっ」

目を覚ますとまぶしい光が。

光に慣れるまでそこでじっとする。

その間に持ってきた道具、首もとのネックレスがあるかどうかを確認。

「さて、そろそろ良いかのう？」

「ん・・・ううん？」

若そうな声だが老いたような口調。  
視線を下から上へ上げる。

「つつ・・・！？」

なんていうかあれだね、ざ・いせかい　みたいな。  
ちよつと浮いてるんですけど。

まあそれ以前に床（？）が雲。

上は想像がつくように青い空だ。

そして横には何も見当たらない。

とりあえず、声の発信源はその人らしい。

第一印象は「若々しい」だった。

「そんなに褒めんでも良い。良くぞ来てくれた。」

「は、はあ・・・。」

褒めてないって。

「お主は神藤鈴歌、シンドウ ススカでいいのだな？」

「・・・まあ、はい。」

「年はいくつだ？」

「14才、です」

「ふむ、スリーサー「ストップ！」・・・なんだ？」

一応女子なんだけどな。

パツとはじめからそこに居たかのように現れたのは。

「ああ、どうも、ラストイーです。」

好青年だった。

「アサヒは元気ですか？」

「あの、ラストイー、さん？母を？」

なんで知ってるんだろう。

「スズカが来る前の冒険者でね、一緒に旅をしたんだよ。お母さんだと聞いたんだけど・・・」

「ああ！そういえば言っていましたね、元気でしたよ。」

そうだった忘れてた。

母から『ラストイーという子が旅についてきてくれるからね』、と聞いていたんだった。

「これ、わしを忘れてはおらんだろうな」

「あ。」

忘れてましたゴメンナサイ

「ところであなたは？」

さて、自分が聞く番だ。

「わしはモトハルだ」

「ここだなにを？」

「架け橋の役割をしておる。ちなみにお主と同じ世界の人間じゃ、今は神扱いだがのう」

「へえ、ここに来て何年目ですか？」

「そんなもの数えてるほうが馬鹿らしいぞい」

数えるのがめんどくさくなるくらいらしい。

地球出身というのも驚いた、モトハルというのも日本人っぽいな。

「さて、鈴歌よ。」

「はい？」

「異世界へ冒険者、そして勇者として行くのだ、力を与え、願いを叶えてやるう。」

勇者かー・・・それは強くないと。  
思考を巡らせる。

「モトハルさん、願いは何個までいいのでしょうか」

「ふむ・・・お主のその謙虚さを評価して制限なしにしてやるう。  
なんせお前の母とは大違いじゃからのう、期待しておる。」

わー・・・何しでかしたんだ母は。

「ええと、とりあえず・・・再設定をできるようにしてもらっても良いでしょうか。」

「再設定、とな？」

「はい、異世界へ降り立った後でも能力などを変更できるように、という意味です」

「ふむ、それは誰も言ったことは無いのう。・・・どれ、いいだろう。」

「ありがとうございます」

これで便利さが増える。

（よしよし、ええと、じゃあ・・・）

「魔法、剣術を中心として基本を完璧に、そして応用も少しできるようにしてください。

あと魔力とか精神力とか、その世界の最大を10倍くらいにしていただけると嬉しいです」

「・・・謙虚じゃのう、あれはそういう願いじゃないがもつとたくさん願ってきたがのう」

うーん・・・母、恐るべし。

それから少しモトハルさんと話をした。

祖母や母の話など、そしてその前の冒険者の話も。参考になる。

「さて。そろそろ時間じゃ。再設定の時はさっき教えたように念話するんじゃないぞ。」

「はい、ありがとうございます。」

「うむうむ。ラストイー。」

「わかりました。さあ、スズカ、行こうか。」

話の中で聞いてはいたが、実際に見ると驚く。

ラストイーの姿が人型から『竜』に変わる。

「乗って。」

「あ、はい。」

ラストイーに乗るとモトハルさんの声が頭に響く。  
念話だ。

——『冒険者』鈴歌よ、世界を救ってくれるな?——

——はい。——

——よし、では行け。期待している。——

ゆつくりとラストイーの身体が雲に沈んでいく。

雲なら服に水がつくのかなあとか思っていたが、なにもなく、ただ優しい風を感じるだけだ。

暫く真つ白い視界が続き、そして急に、鮮やかな色彩が目飛び込んでくる。

「わあっ……!」

距離がかなりあるのだが、不思議と近くにそれがあると思える。  
綺麗、それしか言いようのない景色。  
できることなら写真を撮り——

——撮ればいいじゃないか。

「ラスティー、ちょっと止まりますか？」

「どうしたの？」

「いや、写真を撮りたいなあと。」

風の抵抗も無く、ピタリとその場に急停止する。  
リュックから携帯を取り出す。

カシャッ、という音が数回続く。

20枚ほど撮った。

満足、満足。

「ありがとう、もういいよ」

「じゃあ行くね」

またゆっくりと動き出す。

実を言うと、この上空に居れる時間は決まっている。

普通は意識を飛ばしてテレポートさせるらしいが、今回は自分が願ったため、このような移動法に。

それは上空から異世界を見たい、という願いで、居られる時間は1時間。

まあそれで着くわけが無いそうで、途中からテレポートだそうだ。

異世界だなあ、と思いつつ、空を満喫。

そして意識がブラックアウトする。

## 架け橋（後書き）

ご意見、ご感想、誤字脱字などのご指摘などがあれば下さると幸いです。

『冒険者』の森（前書き）

読んでいただいております。

## 『冒険者』の森

起きたら森でした。

これは・・・祖父の裏の森よりもなんていうか。  
それが、「サワサワ」しているといったら

こちらは「モツサモサ」していると言っていていいだろう。

もしくはそれ以上だ。

まあ、森というか、ラストイーの背中の上だったんだけど。

（こういつのを見てるとやっぱり異世界なんだなあって思うなあ）

周りの風景、ラストイーの存在、などいろいろあるが、感じられる変化もある。

“魔力”だ。

感じたことは無いのに、『それ』と分かる。  
不思議な感じだ。

力が全身に満ちているような。

「あ、おはよう。」

ラストイーが自分に気づいたようで声をかけてくれる。  
凄いね、竜って。

絵とかでしか見ることに叶わなかったけど、うん。  
凄いと言えよう無い。

「おはよう、ここってどこ？なにここ？」

挨拶、そしてまずは現在地を聞いてみる。

「あー、確かハルさんが地図持たせてくれたと思うから、その包み、解いてごらん」

「包み・・・、あ、これか」

そういえば渡されてた気もする。

顔くらいの大きさだ。

ガサガサと地球のものでは無いような手触りの紙を開く。  
開けてすぐのところに地図らしきものはあった。

「・・・ねえ、ラスティー」

「どうしたの？」

「見たこと無い字なんだけど読めるんだけど」

「ああ・・・」

自動的になるらしい。

便利だな、英語と日本語もそういうので意思疎通できたらいいのに。

いつの間にやら擬人術で人型になっていたラスティーに、  
指差して教えてもらいながら地図を見る。

「ここかな。」

「なになに・・・ムゲト？の森？」

「うん、そう。ムゲトの森。」

そしてラスティーからここについての説明を受ける。

要約するとこんな感じ。

- ・王都に近い
  - ・比較的、魔物や魔獣は少ない
  - ・『冒険者』が最初に降り立つ地
- そのため、『冒険者』の森とも呼ばれる

そんな感じで、大体の冒険者はここでラストイーなどといった『案内役』の指導などを受けるそう。理由としては弱い魔物などしか居ないため、それと指導が終わってからの王都への移動が短時間で済む、ということが上げられるらしい。

「ちなみに、ここに異世界人が来ると王都に知らせが入るらしいよ。」

「へえ・・・」

「『冒険者』は目立つからね、すぐ群がられるよ。気をつけないとね」

「ええ・・・」

ゲンナリする。

とりあえず・・・

「お腹が空きました」

「食べ物探そうか」

腹が減っては戦はできぬ、ということ、食料調達。

（数十分後）

「いやぁ・・・食べれるの、これ」  
「大丈夫だよー、美味しいよ?」

地球にあつたら絶対食べれなさそう、とか思いつつ、恐る恐る口に  
する。

「・・・え?」

「ね、美味しいでしょ?」

見かけにはよらないものだね。  
というのが自分の感想です、はい。

とりあえず美味しかった。

今日は果物オンリーだったが、魔法とかに慣れたら肉も出るそう。

「それでは、満腹になったことですし」

「うん、そうだねえ」

魔法の指導を受けることに。

知識はあれど実戦なんぞしたこと無いからね、指導は受けなきゃ。

「まー、まずは魔力の流れを把握することかな」

「感じてるだけとは違うの?」

「うん、流れを掴んでからじゃないと制御とかできないから。」

「あー。」

「じゃあ、僕と同じ風にしてみて。魔力は見えるんでしょう?」

なんていうか、脱力〜みたいな。  
真似してみる。

「流れを把握するのは簡単だからねえ、はい、目瞑って自分の魔力の流れを追って。」

それは数分でできたんだけど、ちょっと疲れる。

「大丈夫そうだね、じゃあ、制御のほうに行こうかー」

そうやってのらりくらり指導してくれ、  
実際にも魔法をできるようになり、  
剣術のほうも見てくれ、

あつという間に1ヶ月。

来たときに話していた期間。

それが過ぎれば王都に行くことになる。

そして、ギルドへ登録（それも特殊な）。

最終的には魔王を倒す、ということになるらしい。

「その魔王を倒せば“チキユウ”に帰れるんだ」

「なんか凄いなえ」

1ヶ月の間に若干の敬語も砕け、普通に話せている。

なんだか異世界で『竜』とタメ口って不思議な感じがする。

ラストーは腕を組む。

そして、

「んー、とりあえず抜き打ちテストでも、する？」

「・・・え、聞いてない・・・」  
「抜き打ちだもん」  
「・・・」

『冒険者』の森（後書き）

ご意見、ご感想、誤字脱字のご指摘などあれば下さると幸いです。

## 抜き打ち（前書き）

読んでいただいております。

## 抜き打ち

抜き打ちテストだそうで。

怖いよう。

「じゃー、早速魔法からやろうか」

「・・・うーん」

「簡単だから大丈夫だよー」

そう言いつつ『空間』からメモを取り出す。

ちなみにこの『空間』は魔法で作り出せる。  
大容量倉庫の役目だ。

自分ももう作ってある。

「質問するから答えてね」

「はあい・・・」

「第一問、魔法属性は全部で何個か」

大丈夫、覚えてる。

「10個」

「正解」

「第二問、属性をすべて言いなさい」

えっと・・・

「火、水、風、土、雷、氷、時、光、闇・・・無？」  
「うんうん、正解」

よかったあゝ

「第三問、一般の人は大体1属性から2属性を持つ。その属性をすべて挙げなさい」

なんだっけ・・・ああ！

「火、水、風、土の4大元素のどれか！」  
「正解だよ」

いやー、記憶力危うし。

「第四問、魔法を発動する際どうしなければならないか」

「イメージすること、それと魔力の制御」  
「そう、正解」

イメージは得意なんだよね。

「んー、これくらいでいいかな、次実技ね」  
「まだあるのかあ」

まずは魔法の実技。

「火と風の魔法を僕に当ててね」

するとラスティーの周りに守りができる。  
指導で見慣れたものだ。

両手を前へ。

右手には火の魔法のイメージと魔力を、  
左手には風の魔法のイメージと魔力を。

無言のまま手のひらから飛び出す魔法、  
それはラスティーの守りにぶつかって。

ゴオオオ・・・

そんな音を立てて、火は風を取り込み炎となり、守りを焼く。

パキインと何かが割れる音。

——守りが壊れたのだ。

それを聞いて魔力を抑える。

いつものように、隣を見ると、ラスティーが居る。

「やっぱり、スズカの魔法は純度が高いね」

人懐こい笑みを浮かべてそういった。

「いやあ、何度やってもなれないんだよね」

「そりゃあそうだろうねえ」

「ほら、地球じゃ魔法なんて無いし。」

「でもいい加減なれないと」

「まあ、魔法はもういいかな、今まで指導したなかで一番スズカが

優れてるから満足。」

「・・・へ、へえ・・・」

そんなこと言われてもわかんない。

自分は元一般人だ。

「それじゃ張り切って次い」

「剣？」

「うん」

自分は空間に手を突っ込んで指導中にラスティーに貰った『それ』を取り出す。

くくく

『それ』の名は『ティオルド』。

なんでも厄介な剣らしい、が、しかし。

自分がティオルドを受け取ったとき、ラスティーが顔をしかめた。

「え、どうしたの？」

「いや・・・うん」

「え？え・・・」

「・・・凄い相性がいいたいだよ・・・、始めて見たから、驚いちゃって」

聞くと、ティオルドを作った人以外に、  
ぴったりとその人の魔力と剣の持つ魔力が重なる人が居なかったらしく、

歴代の冒険者にも持たせたりしていたが、皆持った瞬間に剣に“弾かれる”などしたとか何とか。

ラストイーは作った人、『フタク』から直接『ティオールド』の使い手を捜すことを頼まれ、なんとか持つことができるようになったらしい。

自分が持ったときは弾かれもせず、怪我もせず。

最初から自分の物だったように、手にフィットした。

剣なんて初めて持つから、相当重かったりするんだろーなーなんて思っていたんだけど、

すっごい軽かった。何も持って無いみたいに。

そんな感じだった。

~~~~~

「いつもの通りにね、いつもの通りに。」

ラストイーはいつもの様にイメージして分身を作り出す。
真っ黒い影のようなもの。

それにラストイーは空間から出した剣を装備させる。

「えー、今回は剣が手から離れたら負け。スズ力が負けた場合にはテスト失格としてもう2週間指導ね」

「うわぁ・・・」

これは勝たねばなるまい。

そろそろいい加減ここ飽きた。

「よし、じゃあはじめ！」

ラスティーが風魔法で宙に逃げる。
その間にも自分と分身は剣を重ねる。

ガッ．．．

カカアンツ．．．

ギリイツ．．．

そんな鋭い音が静かなムゲトの森に響く。

そして1人と1つは木の間を駆ける。

仕掛けては避けられ、逃げれば追われて。

埒が明かない。

フェイントをかけることにした。

逃げる振り、仕掛ける振り。

本気の戦い―とは違うけれど。

―自分にとっては激闘の末、影の持つ剣を弾いて飛ばして勝った。

テストにも合格。

文句なし。

「あー．．．疲れた．．．」

「お疲れさま。」

そういいながらラスティーがパチンと指を鳴らして影を消した。

いやあ．．．全力疾走でした。

肩で息をしながら今後の予定を考える。

王都はどんなところなのだろうか、
どんな人がいるんだろうか、
色々気になる。

「じゃあ、明日ここを出るから、準備をしておいてね」
「はい」

ティオルドを空間へしまう。
それを確認してラスティがいつの間にか用意してくれていた早目の夕食を勧める。

「ありがと、頂きますー」

色々あったが楽しかった。
テストも無事合格。

ほっとしつつ、魔獣の肉を焼いたものに齧り付く。
祖父の料理も美味しいけれど
これも中々美味しいんだよねえ、と口を動かす。

・・・顎が疲れた・・・。

抜き打ち（後書き）

ご意見、ご感想、誤字脱字等のご指摘があれば下さると幸いです。

王都までの道のり 1（前書き）

更新遅れて申し訳ありませんでした。
たびたびこういうことがあります。がよろしく願っています。

王都までの道のり 1

次の日。

自分はいつもより早く起きた。

いや、だってソワソワするじゃない。

まあラスティーのほうが起きるの早いんだけど。

いやあ・・・このハンモックも卒業かー、

自分お手製のハンモックを見る。

テントもあつただけだね、うん。

まあ寝心地は良かった。

とっても。

でもこの寝相で何度下に落ちたか・・・。

そんなことを思いつつ地球から持ってきた毛布などを空間に放り込む。

あと川にいつて歯も磨く。

歯磨き粉はダメなのでラスティーに教えてもらった木の葉っぱの汁で磨く。

苦いです。

でも良い匂いです。

ミントな感じ。

「あー・・・あとは・・・なんかあるっけ？」

「・・・大丈夫なんじゃないかな？」

「んじゃあ、いつでも行けるよ」

汗を拭くものと飲み物だけをこれまた別に持ってきた肩掛けに入れる。

なんでもラスティーに乗ってはいけならしく、徒歩で王都まで行く。

そんなに時間も掛からないそうナ。

「スズカって面白いよねえ」

「ええ、どこがさー」

「なんとなく全体的に？」

「なんで疑問系」

くっだらない話をしつつムゲトの森を出る。

踏まれて道ができてるから草を掻き分けなくてもすむ。

これは楽だ。

視界がクリアになった。

「うわぁ・・・」

荒野。

ところどころにサボテンみたいなものが生えている。

あと西部劇だったかわからないけど、草の丸いのがコロコロしてる。可愛いと思ったんだけど、どうなのそれ。

森の入り口？のところからまっすぐ、そして時折曲がっている道がある。

どうやらそれを辿って行けば王都らしい。

少しゆらゆらと揺れている空間の奥に、灰色の大きな壁が見える。

あれが王都か、王都の城壁か。

城壁なんぞ初めて見るもんで、目を凝らしてみてしまっ。

「近くに行けば見れるから、そんなに目使わなくなっ。

ラストイーが楽しそうに笑う。

いや、自分は真剣なんだっ。

歩き出しながらラストイーが言う。

「行く時間の中で教えられるだけ王都のことを教えとくね。森じゃ指導ばっかりだったから覚えて無いでしょ？」

その通りでございます。

「まず、あの王都の名前は『ミュシリー』、ちなみにこの大陸は『ホズワルン』っていうんだけど、ホズワルンの中心都市なんだ。」

「へえ・・・じゃあ色んな人が通るの？」

「冴えてるねえ」

「おお」

「そうだな、一番多いのがやっぱり人間族かな」

「人間な」

「その次が獣人族、竜人族、亜人族、時々そのハーフとかクォーターとか見かけるね」

「なんかいろいろあるんだね」

「うん、そのほかにももつとたくさんいるよ。獣族、竜族、魔族とかね。」

「すごいな・・・」

なんか色々あるそうで。
まず思ったことは獣族の方をもふもふしたいです。

「エルフとかは亜人族に含まれるのかな？僕もよくわかってないんだけど。」

エルフは誇り高いから、ほかの種族と一緒にされるのを嫌う人もいるから気をつけて。」

エルフもいるのか。

美女、美男。うわぁ楽しみ・・・、うん。

「とりあえず色々な種族の色々な性格の人がいるから、とにかく気をつけること。」

「はい」

「えー、じゃあ次は陛下ね。今の陛下は『ロディ・ミュシリー』で、とても温厚な人で『ロディ陛下』って親しまれてる。

陛下の妻は『フェネステラ・ミュシリー』、彼女も優しい性格の人だよ。」

「お子さんとか居ないんですか？」

「居るよ。1人だけ。」

「1人？側室とかのなんか・・・えーと忘れたけど1人だけ？」

「そう。側室はあっても子供は作らせないとかなんとか。」

ああ、それでその子供は『ブリス・ミュシリー』、ちょうどスズカの1個2個下かな？多分その位」

「ほえー・・・」

「すっごい活発だね・・・問題児だって」

うわー・・・

とても会いたくないです。

「あ、王都にいったら陛下にも会わないとダメだから、必然的に会うことになるからね?」

・・・うわぁ・・・。

めんどくさいことになりそうだ・・・。

王都までの道のり 1（後書き）

ご意見、ご感想、誤字脱字等のご指摘などがありましたら下さると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8601y/>

鈴歌、異世界へ

2011年12月5日13時48分発行